

英語の不可算抽象名詞の意味について

嶋 田 裕 司

1. はじめに

英語の文法書は、名詞を記述する際に、可算と不可算の区別をする。可算とは、数えられるもの、不可算とは、数えられないものである。可算名詞は、実際には単数形または複数形として用いられ、単数形には不定冠詞 a が付き、複数形には、規則変化であれば語尾 -s が付く。さらに、どちらの形も数詞によって修飾することができる。たとえば、名詞 book であれば、I have a book. / I have two books. のように用いる。それに対して、不可算名詞には、単数と複数の区別がないので、不定冠詞 a が付くことはなく、また、名詞語尾 -s が付くこともない。さらには、数詞によって直接数えることもできない。したがって、名詞 water を例にとれば、*There were two waters in the bucket. のように表現することはできない。許されるのは、There was water in the bucket. であり、量を表現するのであれば、...some water / a lot of water... のようになる。概略、以上のことが、名詞の可算と不可算の文法上の区別について言われることである。¹

それでは、どのような名詞が可算であり、どのような名詞が不可算であるのか。この問いに答えるためには、名詞の意味を1つずつ調べて分類し、その類ごとに答えてゆく手法がとられる。最もよく知られている方法は、個体 (individual) という概念による方法である。個体とは、それ以上分割できない最小単位である。たとえば、名詞 boy が指し示すものには最小単位があり、それを更に分割すると、もはや boy という語が指し示すものではなくなる。このような意味での個体がある場合には、その類を表す名詞は、可算名詞となる。それとは対照的に、最小単位のないものを表す名詞は、不可算名詞となる。たとえば、名詞 water が表す物質は、その際立った例である。water が表すものを、ある量だけ取り出し、それを更に2つに分けても、water と呼ばれることには変わりがない。このように分割可能なものには数える基礎となる個体がないので、それを表す名詞は、不可算となる。以上のような比較的分かりやすい事例が、可算と不可算に関する意味的・認識的説明の始まりである。²

たしかに、boy や water のような具象物に関しては、対象に最小単位があるのか、という問いに対する答えによって、可算と不可算の区別はある程度つく。しかしながら、手で触れることのできない抽象的な対象に関しては、上のような分割可能性によっては、可算と不可算の区別はできない。例えば、opinion と advice を比べると、次の例では、opinion は不定冠詞 a が付くので可算であり、advice は無冠詞なので不可算である。

- (1) a. ...an expert is often required to give an opinion....
- b. I am here to give you advice.

このような相違があるにもかかわらず、どちらの語も抽象的な意味を持つために、上の基準を文字通りに適用することはできない。それでは、どのような基準を設定すれば、抽象的な名詞に関しても、可算と不可算という文法形式の相違を意味に結びつけることができるのであろうか。

このような問いに対して、答えを示唆するのは、1つの名詞に可算と不可算の両方の用法がある事例である。たとえば、名詞 time は、次のように可算と不可算の両方の用法がある。

- (2) a. We had a wonderful time.
b. Time will tell.

文法書の中には、このような事例の組を列挙しているものもあり、両用法を多数並べることには、それなりの効果があると思われる。その目的は、読者に2つの用法を観察する機会を与えて、その相違を直観的に理解させることにあるのであろう。しかし、このような方法では、可算と不可算の相違が言葉によって明示されていないので、解釈は読者に任されることになる。³

本論の目標は、名詞の可算と不可算についての理解を深めることにある。ただし、1つの名詞に2つの用法がある場合を観察するのではなく、主に不可算としてしか使われない抽象名詞に注目し、その意味を明らかにすることを試みる。その際、その名詞に近い意味を持つ可算名詞と比較して意味の相違を明確にすることを目指す。その結果として見出される意味特徴が、その抽象名詞が不可算として用いられる理由であると仮定することになる。それは、具象名詞 water, milk, soil などが不可算である理由が、対象が分割不可能であることにあると仮定するのと同じ思考法である。観察の対象とするのは、名詞 evidence, information, advice である。これらは、不可算名詞として知られ、文法書と辞書にそのことが記されている。それでは、なぜこれらが数えられない名詞なのか。この問いに答えることが、この論文の目的である。

なお、例文は、すべてBNCから引用したものであり、また、例文中の下線は、筆者が加えたものである。

2. evidence

名詞 evidence が主として不可算名詞として用いられる理由は、その意味にあると仮定して、ここでは、その意味がどのような性質を持っているのかを考える。その際に、evidence と比較的意味が近く、しかも可算名詞である sign と比べることによって、一方が不可算として振舞い、他方が可算として振舞う理由を見出したい。

はじめに、evidence と sign に対して学習辞典が与える定義を比較することによって、それぞれの語の意味が一般にどのように記述されているのかを見よう。(3) として、LDCE4の辞書項目から関係する定義を引用する。(3a) の evidence の定義には、sign という語が含まれていて、evidence と sign が類義語であることが読み取れる。また、(3a) と (3b) の定義は、「何かが存在することを示す、または、何かが真実であることを示す」という共通部分を含んでいる。この点からも、意味の類似を見て取ることができる。

- (3) a. evidence: facts or signs that show clearly that something exists or is true
b. sign: an event, fact etc that shows that something is happening or that something is true or exists

つまり、上の定義に従えば、evidence も sign も、「何かが存在すること、または何かが真実であることを示すもの」である点で似ていることになる。さて、これほど似た記述をされているにもかかわらず、なぜ一方が不可算、他方が可算になるのであろうか。

この問題に取りかかる前に、evidence が不可算であり、sign が可算であることを確認しておこう。初めに evidence が不可算であることを示す事例を観察する。(ただし、実際には可算用法の evidence も観察できる。このことについては、この節の最後で言及する。) evidence は、(4a) の

ように無冠詞かつ原形で現れる。あるいは、量を表す表現で修飾され、(4b-d) のように some, much, little が修飾する事例が観察できる。それに対して、*there are many / a few evidences.... のように数表現が evidences を修飾する使用例は見出せない。

- (4) a. ...there is evidence that this pattern is changing.
 b. There is some evidence that this is indeed the case....
 c. There is much evidence that this is true.
 d. Yet so far there is little evidence of this effect.

また、evidence を数えるときには、a piece of, several pieces ofなどを付けるという説明に従う事例もある。

- (5) a. There is another piece of evidence to suggest that....
 b. Malloch bases his case mainly on three pieces of evidence....
 c. There are several pieces of evidence that suggest that....
 (6) a. There was a body of evidence that established that....
 b. Two kinds of evidence may indicate the probable source of....

したがって、evidence は、普通は不可算として振舞うと考えてよいことになる。以上の観察とは対照的に、類義語の sign は可算として扱われている。次の例では、sign は名詞語尾 -s が付加されて signs となり、数詞 one, two が修飾している。

- (7) a. There are signs that this is happening.
 b. One sign of the increasing prosperity of some farmers was....
 c. There were two signs which gave prisoners away: their primitive Italian and the way they walked,....
 (彼らが捕虜であったことが露見する兆しが2つあった。イタリア語が下手なことと、歩き方が違うことだった。)

したがって、これらの例は、sign が可算として振舞うことを示している。

以下では、evidence と sign に学習辞典より詳しい定義を与えて、それぞれの意味を明確にする。その上で、その定義を支持するための事例を示して、2つの語の意味が異なることを論じたい。

学習辞典の定義は、上の(3)に示したように、区別が付きにくいほど類似している。しかし、evidence と sign の意味には、明確な相違がある。evidence の意味を成立させているのは人間の意図であり、sign には、その意味が欠落している。evidence には、その意味が成立する背景として、〈何かについて主体が立証したいという意図を持っている〉ことがあり、evidence という語は〈その立証のための手段となる事物〉を指し示している。したがって、evidence の意味は、主体が人を説得して主張を受け入れさせるという機能にあり、その働きが認められるものこそが evidence なのである。したがって、主体の意図次第で、evidence には、どのような事物でもなりうる。それと比べると、sign には、この立証の意図という背景と、そのための機能という意味がなく、この語は、単に、〈何かが存在することを示唆する物事〉を表すのみである。evidence は人の意図から生じるものであり、sign は意図とは無関係に対象そのものから生じるものである。

結論を先に述べると、evidence の意味の中心となっている、この機能の意味が、この名詞を不可算にしているということが本論の考え方である。

これから、この2つの名詞のそれぞれの意味を示唆する事例を観察しよう。最初の例群は、名詞が to 不定詞を従える場合である。(8) に示すように、evidence に続く to 不定詞として suggest, support, show, prove, indicate が生じる使用例はあるのに対して、これらの動詞が sign(s) に続く to 不定詞として現れることはほとんどない。つまり、*...a sign to suggest... や *...signs to support... という表現は用いられないのである。⁴

- (8) a. There is some evidence to suggest that this difference is critical.
 b. There is some evidence to support this theory.
 c. There is evidence to show he is at fault.
 d. ...there is certainly evidence to prove that the drug attacks the body's fatty tissues.
 e. There is sufficient evidence to indicate that students may differ markedly in the ways they set about learning.

この事実は、上で仮定した evidence と sign の意味から生じる帰結と考えることができる。(8) において evidence の後にある to 不定詞は、evidence の意味の背景にある主体の意図が顕在化したものであると考えられる。evidence の意味の背景として、何かを立証するという意図が存在すると仮定すれば、それが、到達点を表す to とその補部である原形動詞 suggest, support, show などとして表出すると考えることができる。しかも、これらの動詞の意味は〈示唆する〉〈支持する〉〈示す〉などであり、evidence の背景にある〈何かを立証する〉ことに整合している。それに対して、sign の後には、これらの to 不定詞が生じない理由は、sign の意味には人間が意図することが含まれていないからであると言うことができる。

同様の不均衡は、evidence または sign が主語になり、suggest, support, show, prove, indicate が主動詞となる場合にも観察できる。evidence が主語の場合には、(9) に例示するように、これらの動詞が用いられるのに対して、sign が主語になると、これらの動詞はほとんど姿を現さない。僅かに観察できるのは、(10) に示した all (the) signs suggest... という表現形式である。

- (9) a. Our evidence suggests they're wrong.
 b. Little evidence supports your conclusion that...
 c. Evidence shows that they actually enjoy their training.
 d. New evidence also proves that it [=UVB] causes a chemical reaction in the skin,....
 e. Current evidence indicates that older people are more healthy than popular stereotypes suggest.
- (10) a. It's taken the club a couple of years to get its youth policy back on track, but all the signs now suggest that the current crop of teenagers is the most promising...
 b. THE LAST batches of refugees...included an East German thrash metal band. ...and all signs suggest they enjoyed what you might call a safe passage.

よく観察すると、(10) の signs には、人を説得して主張を受け入れさせるといった機能は無いように思われる。(10a) では、サッカークラブが若手の育成を元の状態に戻すのに数年かかったこと、そして現在の少年たちが最も有望であることを示す兆候ばかりが見えると記されている。

(10b) では、難民の中に東ドイツのロックバンドがいて、彼らが安全な経路をたどることができたことを示す形跡ばかりが見えるという。どちらの例も、ある事態を示す兆候があることを筆者が報告しているのみであり、その事態が生じていることを立証する意図はないと思われる。

evidence には、人を説得して主張を受け入れさせるという機能があり、sign には、それがないことは、show evidence of と show signs of の使われ方にも現れる。(11) と (12) の例を観察しよう。evidence を用いた (11) の文の主語は、意味的な役割としては、道具または行為者である。それに対して、signs を用いた (12) の文では、主語が、変化を被る主体になっている。たとえば、(11a) では、胸のレントゲン撮影が道具となって、結核に罹ったことがあることを示す証拠を提示した、と解釈できる。この文の背景にあるのは、文中に現れない人物が意図する行為であり、evidence は、その行為において、人を説得する機能をもっている。(11b) では、ビデオが選手の接触を示す証拠となっているという。ここでも、背景に人物の意図が感じられる。さらに、(11c) では、主語に人物が表出し、その人物が立証する意図を持っていることが明瞭になっている。対照的に、signs を含む例文を見ると、(12a) の従属節 if... では、主語の子供は変化を被る主体であり、子供の様子の変化が体調変化の兆候として観察者に解釈される、ということである。ここでは、子供自身の変化が signs として生じ、この signs は medical shock と直接結び付いている。そこには、目的を達成するための機能という意味は介在しない。(12b) は、歩いている患者が不安定さの兆しを見せるということであり、主語の患者は、不安定さの兆候を感じ取られる対象であり、患者自身が意図的に兆候を示しているのではない。同様に、(12c) の主語も意図的に怒りを表現しているのではない。evidence と signs を比べると、言わば、evidence は、行為者の意図の中にあるのに対して、signs は物事から生じて観察者が感じ取るものである。

- (11) a. Chest x ray showed evidence of previous tuberculosis....
 b. ...the video showed evidence of contact between the players....
 c. Professor Jose Fernandez-Britto...has shown striking evidence of the death of cancer cells....
- (12) a. Call an ambulance immediately if your child shows signs of medical shock, such as dizziness,....
 b. ...she [= the patient] shows signs of insecurity when walking.
 c. Rose showed signs of both anger and tears,....

さて、最後に、evidence が可算名詞として用いられる事例を観察しよう。OED と WTNI は、可算と不可算の両方の事例を示しており、しかも、可算の事例は、意図性のない方の定義の例としてのみ見出される点は注目に値する。BNCにおいても、少数ながらも語尾 -s の付いた evidences の事例が見られるので、以下ではこれらを観察する。その結果を先に述べると、語尾 -s のある evidences が用いられた例においては、この語は意図と機能の意味を失って、signs の意味に近い用法になっているということである。このことは、evidence が不可算となる理由が、その意味（すなわち、立証するために人を説得する機能）にあるという仮説を支持することになる。つまり、evidence は、その意味から、意図と機能の部分を取り除いたときのみ、可算名詞として用いることが許されることを、この仮説は予測しているからである。

可算用法の evidences が現れる (13) の事例は、何かを立証しようとする行為の文脈ではなく、何らかの事態や存在に関する観察を表す文脈である。(13a) では、Foxholes という洞窟に新石器時代の居住の痕跡が見つかったことが記されている。(13b) では、高等な昆虫の中には、小顎の

形が甚だしく変化したので、その原始的構造の痕跡を留めないものが多いという。(13c) では、今は廃墟となっている Crackpot Hall は、付近の鉱山業が原因となって地盤沈下の兆しが現れたときに放棄されたという。いずれにおいても、evidences は、観察の対象を表していて、そこには何かを立証する目的は感じられない。

- (13) a. In the outcrops on the left at this point is the Foxholes, a cave that has produced evidences of Neolithic occupation.
- b. In many higher insects the maxillae are so greatly modified that they no longer retain any evidences of their primitive structure.
- c. Crackpot Hall is a sad ruin in a beautiful location. ... Mining activity nearby was the cause of its abandonment in the 1950s, when evidences of subsidence became apparent.

次の(14)の例において、evidences が表しているのは、人を説得するための機能でもなく、何らかの兆候でもない。ここでは、evidences という概念自体が論じられている。言い換えると、この文脈では、証拠 (evidence) とは何かということが話題となり、証拠を考察の対象にしている。これらの文章の筆者は、evidence の持つ機能や性質の効力が影響を与える空間の外側にいて、その内部にある evidences を観察している。この意味で、evidence は筆者への影響力を失って、完全に客体化している。このことが、evidences という可算用法を引き起こしていると考えられる。(14a) では、「前提」と「証拠」の役割が語られていて、前提の役割は主題に光を投げかけることであり、証拠 (evidences) の役割は主題に重みを与えることであるという。ここでは、証拠という概念自体が論じられている。(14b) でも、証拠 (evidences) が、証明 (proofs) と共に、論考の対象となっている。おそらく(14b)は次のように述べているのであろう。心情の中には、ばかばかしくて、偏見と呼ぶべきものがある…。あたかも、哲学における証明・証拠自身が、自らの合理性を誤解して、合理性とは人々の実際の考え方そのものであると思っているかのようなのであろう。したがって、ここでも evidences は、筆者の考察の対象となっていて、筆者は外側からそれを観察している。

- (14) a. The role of premises is to throw light on a subject; the role of evidences is to give weight to it.
- b. ...some beliefs *are* nonsense and deserve to be called prejudice.... It is as though all the proofs and evidences of philosophy had mistaken *their* rationality for how people actually think.

以上で、evidence の意味に関する考察を終える。ここで示したことは、evidence という語の意味の背景には、〈主体が何かを立証する意図〉が存在し、evidence は、〈その立証のための手段となる事物〉を指し示しているということである。すなわち、evidence となる事物には、立証を意図する行為の中での機能が与えられる。そして、意図における機能という概念こそが、この語を不可算にしていると考えられる。

3. information

つぎに、information が不可算名詞として用いられる理由を考える。前節で evidence について考えたときと同様に、information が不可算である理由は、その意味にあると仮定して、比較的近い意味を持つと思われる名詞 knowledge と比べることによって、その意味的な性質を明らかにする。

information と比較する対象として knowledge を選ぶ理由は、この2つの語の意味が類似していて、しかも、knowledge は、可算としても不可算としても用いられるからである。OED と WTNI は、information を定義する際に、knowledge という語を用いている。(15a) は、OED から引用した information の定義である。それに対して、(15b) に挙げた knowledge の定義は、OALD6 のものであり、表現の中に information という語が現れる。

- (15) a. information: Knowledge communicated concerning some particular fact, subject, or event
 b. knowledge: the information, understanding and skills that you gain through education or experience

このように、辞書の定義において、この2つの語が互いの定義の中に現れることは、2つが類義語であることの証であり、その意味の相違を見出すことによって、可算と不可算という文法的相違の源を理解することができると思われる。

しかし、意味について考える前に、この2つの語の可算・不可算に関する性質を確認しておこう。結論は、先に述べたように information は普通、不可算であり、knowledge は可算にも不可算にもなるということである。はじめに、information の使用例 (16) を見よう。(16a) では、この語は、無冠詞で原形のままなので、不可算として用いられている。また、(16b-d) では、量を表す some, much, little に修飾されることから、ここでも不可算である。(17) は、a body of, many pieces of を付けることによって、数える例である。

- (16) a. We have information about methods of curing disease,....
 b. Please could you give me some information on this fish?
 c. ...they don't have much information about other, better off workers....
 d. There is little information about his early life....
 (17) a. There was already a substantial body of information on plant physiology,....
 b. Many pieces of information given to the reader are subsequently contradicted,....

次の (18) の例は、knowledge が可算と不可算の両用であることを示している。(18a) では、この語は、無冠詞かつ原形であり、不可算用法になっている。(18b-c) では、不定冠詞 a が付き可算単数、(18d) では、語尾 -s が付き可算複数である。ただし、この語に数詞 one, two, many などが付く例が BNC では観察されないので、「可算」と呼んでも、この語に関するこの用語の解釈は、不定冠詞 a が付くか、名詞語尾 -s が付くということにとどまり、数詞が付くことまでは意味しない。(19) の例は、one body of, two pieces of と数える場合である。

- (18) a. You have knowledge of something that might bring danger?
 b. ...I have a knowledge of the Hundred Years War and feuds between England and

France.

- c. ...guards were compelled to have a good knowledge of first-aid.
 - d. The contradiction between knowledges emerges in everyday life....
- (19) a. ...physics and chemistry are not completely different subjects, but part of one body of knowledge.
- b. ...two pieces of knowledge that are in conflict....

さて、information と knowledge について、それぞれの意味の特徴を考えよう。前節の evidence に対して与えた仮説と同じ形式の意味が、information にもあると思われる。information の意味を成立させているのは、人間の意図であり、knowledge にはその意図がない。information の意味の背景には、〈何かについて知ろうとする主体の意図〉が存在し、information という語は、〈その望みを満足させる機能があるもの〉を表している。簡単に言えば、〈何かについて知りたいこと〉である。この語の意味は、この程度に抽象的なものであり、主体の意図と、その中での機能という関係によって捉えれば、evidence の意味の形式と同じである。それとは対照的に、knowledge の意味には、このような意図と機能の関係は存在しない。この語においては、知りたいのか知りたくないのかは問題ではなく、単に人が何かについて〈知っていること〉という意味が表されている。知っている内容あるいは事柄は、主体の心にある意図とは無関係に、具体物が存在するかのよう認識されている。

knowledge の意味が具体物であるかのように感じられることを示す証拠はいくらか存在する。それは、「深い知識」や「広い知識」について語ることができるからである。「深い」「広い」によって「知識」を形容するとき、知識は具体的な物体であるかのようなのである。(20) は、形容詞 deep, wide, broad が knowledge を修飾する例である。(20a) の a deep knowledge では、深さが認められ、深さを測るための両端（たとえば水面と水底）が知識にはあることになる。同様に、(20b-c) の a wide / broad knowledge では、幅を測るための両端が知識には存在することになる。このように knowledge は、深さと幅がある物体として認められる場合がある。それとは対照的に、information に関しては、これらの形容詞が修飾する使用例は BNC には見られない。わずかに見つかるのは、形容詞の比較級 wider, broader を伴う例が 1 例ずつである。ここで興味深いのは、比較級を用いると、幅を測るための両端が確定しないことである。(21a) では、彼のその時々好み、情報が増すに連れ、知覚が鋭くなるに連れ、変化する可能性があると言っている。この表現は、好みと情報の幅とが連動していることを表しているのであり、情報を一定の幅のある物体として扱っているのではない。同様に、(21b) では、捜査をするとき、警察は訴追するための証拠を集めるのに対して、ソーシャル・ワーカーは、それよりもっと広い情報を得ようと言っている。ここでも、情報をもっと広いことまでは分かるけれども、その広さが定まる印象はない。

- (20) a. He had a deep knowledge of the habits of all the local wildlife....
 - b. He...had a wide knowledge of classical music,....
 - c. A Careers Officer would...have a broad knowledge of local industry.
- (21) a. There will always be the possibility that his spontaneous preferences will change with wider information or finer perceptiveness,....
- b. For instance, during an investigation, the police must concentrate upon collecting adequate and appropriate evidence for a possible prosecution, whereas social

workers are concerned to gain much broader information about the child and the family's situation and resources.

(20) と (21) の例は、knowledge には一定の深さと幅があり、おぼろげながら輪郭が定まるのに対して、information では、それが定まらず、限界が不明確であることを示唆している。

ここで、information の意味として仮定したことを支持する証拠を探すことにしよう。上では information の意味の背景には、〈何かについて知ろうとする主体の意図〉があり、この語は、〈その望みを満足させる機能があるもの〉を指し示すと仮定した。ここでは、そのことを示す事柄を見出すために、information を目的語にとる動詞の種類に注目する。

はじめに、主動詞が、生産、伝達、獲得を表す produce, provide, convey, acquire, obtain の場合について調べると、これらの動詞は、information も knowledge もその目的語として従えることがわかる。つまり、情報も知識も、人はそれを生産し、伝達し、獲得することができる。(22) が information の例であり、(23) と (24) が knowledge の例である。knowledge の例のうち、(23) が不可算、(24) が可算である。この2つを比べると、不可算より可算の例の方が、具体性が高い(あるいは記述が詳しい)と思われる。(23a) と (24a) を例にとれば、produce basic knowledge よりも、produce a real knowledge of history の方が、記述の具体性が高いと感じられる。いずれにせよ、これらの例が示すことは、information も knowledge もこれらの動詞の目的語になりうるということである。

- (22) a. ...we are producing further information on all research projects....
 b. ...this survey provides valuable information on employment and conditions of work,....
 c. We feel that our function is to convey accurate information.
 d. I wish to acquire interesting information.
 e. We can obtain information from people such as these....
- (23) a. All I do is produce basic knowledge.
 b. ...a lecture is supposed to provide knowledge, elucidation, or interpretation of texts....
 c. ...a story told in dramatic form can engage the audience emotionally and convey knowledge, ideas, and strategies.
 d. Participants thus acquire knowledge of specific subjects....
 e. ...indeed we cannot obtain knowledge except through praxis.
- (24) a. ...the task of criticism...is...to produce a real knowledge of history.
 b. Full-time training...can provide a much deeper knowledge of the theory of farming,....
 c. Dissection has traditionally been a means of acquiring a knowledge of anatomy.
 d. ...discussion and investigation, which is absolutely necessary to obtain a knowledge of facts.

上の例群とは対照的に、目的語として information は取るけれども、knowledge はほとんど取らない動詞群がある。それは、探し、集め、選択することを表す動詞である。すなわち、ask for, look for, gather, collect, extract, select, retrieve という動詞 (+前置詞) は、(25) に例示するよ

うに、information を目的語にする使用例が多く見られる。

- (25) a. Please ask for more information about services which you think might be helpful to you.
- b. The natural place for a person to look for information about an unknown word is in a dictionary.
- c. ...and we gathered valuable information on the flora of the area,....
- d. The team will collect information on work and life histories of 1,000 inhabitants in Rochdale....
- e. ...geographers will become more adept at extracting information from such images.
- f. In the main, selecting information occurs at the question analysis and planning stages of writing.
- g. The ability to retrieve information from a book or other source,....

対照的に、knowledge に関しては、これらの動詞が目的語とする例は、BNC には、ほとんどない。ask for, look for が knowledge を目的語にする例は、わずかに見られるのに対して、extract, select, retrieve の場合には、knowledge を目的語にとる例は全くない。また、gather, collect については、knowledge を目的語にする例が1例ずつ見られるのみである。これらの動詞の意味は、程度の差こそあれ、対象を獲得する際の様態を表している点でよく似ている。たとえば、look for は対象を獲得できないこともある探索であり、extract は困難を伴う抽出であり、gather は広い範囲から集めることである。いずれも、獲得に至る途中の様子も描く動詞である。

それでは、なぜ、動詞と目的語の選択関係にこのような不均衡が生じるのであろうか。その答えは、information の意味の背景として、何かについて知ろうとする主体の意図があることに関係している。つまり、information とは、主体が選び取る対象である。もう一步踏み込んで言うと、それは主体が選び取ったときに、主体にとっての information となるのである。主体が選ばなかったものは、information とはならない。たとえば、(25c)に戻ると、我々がその地域の植物相に関する情報を集めたということは、我々がそこで取捨選択をして手に入れた事物のみが我々の情報へと変わり、それ以外の事物は情報とならなかったということである。つまり、集めることの結果として情報は生じるのである。他の例でも同様に、抽出 (extract) すること、選択 (select) すること、得る (retrieve) ことの結果として情報が生じるのである。何かから主体が何かを選び取るときに、それが主体にとっての information となる。

以上のように考えると、information が look for, extract, gather のような獲得の途中の様態を表す動詞の目的語になりやすい理由がわかる。information は意図して得るものであるから、得るまでの過程や容易さなどが関わってくるので、どのようにして得るのかを表す動詞と結びつきやすいということであろう。それに対して、knowledge がこれらの動詞の目的語になりにくい理由は、その意味に主体の意図は関与せず、単に〈知っていること〉であるので、獲得の途中の描写が無関係になるということであろう。

つぎに、動詞 have の事例を観察しよう。have はこれらの名詞を目的語にとり、have information about / on... と have a knowledge of... という表現をつくることがある。それぞれの表現が生じる文脈を観察すると、information の方は、誰かが〈知りたがっていること〉と解釈するのが適切であり、knowledge の方は、〈既に知っていること〉と解釈するのが適切であることがわかる。この解釈が適切であれば、上で仮定した区別がここにも現れていることになる。つまり、

information には、〈何かについて知りたいという意図〉が背後に存在し、この語は、〈その気持ちを満たす機能のあるもの〉を指し示すこと、また、knowledge には、その目的がなく、こちらの語は、〈知っていること〉のみを指し示す、という区別が現れている。

はじめに、information の具体例を観察しよう。(26a) は、あなたが、このコラムに載せたいチーム情報があれば、直接私にだけ送ってください、という。この文脈では、information は、人が知りたがる（であろう）ことを表している。(26b) は、その男は、モイラの失踪について情報を持っているかもしれない目撃者として扱われていた、という。ここでは、information は、捜査員が知りたがっていることである。(26c) は、英国電信電話会社は、聴覚障害者を支援するための広範囲の機器に関する情報を持っている、という。ここでは、information は、支援する人々が知りたがることを表しているのであろう。いずれの例文においても、information は、主語の人物（または組織）が持っているけれども、それ以外の人々が知りたがる事柄を表している。

- (26) a. ...and if you have information about your teams for inclusion in this column, then write only to me direct!
- b. The man was being treated as a witness who may have information about Moira's disappearance.
- c. British Telecom have information on a wide range of equipment to assist hearing impaired people.

次の (27) は、knowledge の例である。(27a) は、これ (this で指し示すもの) が、その話題に関する知識のある専門家向けのカatalogueである、という。この文脈で、knowledge は専門家が知っていることであり、誰かが知りたがっていることではない。(27b) に至る文脈によれば、Ray Wilkins はサッカー選手、Mr Souness は選手兼監督である。that で始まる従属節では、Souness 氏が試合のプレッシャーを生きがいにして活躍したのみならず、経営の暗い側面をも知っていた、という。ここの knowledge も、既に知っていることを表している。最後に、(27c) では次のように記されている。「個人から買い取ることは、利益が大きいことがありうる。しかし、対象に関する知識がなければ、そのような取引は危険がないわけではない。」ここでも、knowledge は、あなたが既に知っていることを表している。

- (27) a. In fact this is a catalogue for the specialist who already has a knowledge of the subject, rather than someone approaching the art for the first time.
- b. Ray Wilkins, a former Rangers midfield player, believed that Mr Souness thrived on the pressures of the game but also had a knowledge of the darker side of management.
- c. Buying from a private individual or dealer can be extremely beneficial, but unless you have a knowledge of the subject..., such transactions are not without risk.

以上のように、(26) と (27) の使用例は、information と knowledge に関する意味の仮説に従う例である。

本節の information と前節の evidence の意味は、よく似た形式を持っている。information は、何かについて知りたいという主体の意図を背景にして、その望みを満足させる働きのあるものを表し、evidence は、何かを立証したいという主体の意図を背景にして、その目的を果たす機能のあ

るものを表す。一般化すると、どちらも、〈主体の意図〉が背景にあり、〈その目的を遂げるための機能を持つと主体が認めるもの〉とすることができる。そして、このような一般化の例となる語が、不可算名詞となるということが、本論の考え方である。

4. advice

最後に、名詞 advice について観察しよう。ここでも、evidence, information について行ったのと同様に、advice が不可算名詞であることを確かめることから始める。つぎに、類義語と比較することによって、その意味を仮定し、その仮定を支える事例を観察する。

advice の意味を理解するために比較する語としては、opinion を選ぶ。OED では、advice が Opinion given or offered as to action と記されており、学習辞典でも an opinion で始まる記述がとられている。たとえば、LDCE4では、(28a) のように定義され、advice が opinion の一種であり、それを与える側から見た記述となっている。(28b) に挙げたのは、opinion の定義であり、これも LDCE 4 からの引用である。この中では、advice という語は現れないので、2つの語義の関係は、一方的になっている。

- (28) a. advice: an opinion you give someone about what they should do
b. opinion: your ideas or beliefs about a particular subject

このように、(28) の記述は、advice の意味には opinion が含まれていることを思わせる。

語義の比較を進める前に、advice が不可算であること、また、opinion が可算と不可算の両用であることを確かめておこう。(29) と (30) は advice の例である。(29a) は、advice が無冠詞かつ原形で現れることを示し、(29b-d) は、量を表す some, much, a little が修飾することを示している。さらに、(30) は、数を表す際に、one piece of, two pieces of とすることを示している。このような特徴は、advice が不可算名詞であることの証である。⁵

- (29) a. You can make suggestions, offer advice and give support but...
b. If you would like some advice on the amount you could borrow....
c. I would however prefer that you got as much advice as possible from the books first.
d. All I can do is offer you a little advice.
(30) a. But there's only one piece of advice that matters really:....
b. My last two pieces of advice are simple.

次の (31) と (32) は、opinion の例である。この語が不可算になるときは、(31a) のように量を示す修飾語が付くことは稀であり、無冠詞で原形のまま用いて、(31b) のように他の概念 (たとえば fact) と対比するか、あるいは (31c-e) のように opinion の相違を表す場合が多い。

- (31) a. I wish he would...express some opinion, but...
b. How much of what they say is fact and how much is opinion?
c. Opinion is sharply divided on this issue,....
d. You and Luke had a difference of opinion, I gather.

e. Whether this is desirable or not is a matter of opinion....

(32) では、opinion は可算である。その数を表すのが (32a-b) であり、その相違や多様性を表すのが (32c-e) である。

- (32) a. If you have an opinion you have a right to express it....
 b. ...there appear to be almost as many opinions as there are professionals.
 c. A variety of opinions was expressed in Committee,....
 d. There was frequently a conflict of opinions.
 e. Stoddart quotes a great number of opinions on this subject:....

以上で、advice が不可算であること、opinion が可算と不可算の両用であることを見た。

さて、上で見た辞典の定義を参考にして、advice の意味と opinion の意味を記述してみよう。advice にも、evidence と information と同様に、その意味を成立させるための背景があり、それはこの語を認識する主体の意図である。advice には、その意味が成立する背景として、〈どのような行動を取るべきか決めようとする主体の意図〉があり、advice の意味は〈その参考にするための他人の考え〉ということである。advice の意味には、判断の参考にするという機能がある。それに対して、opinion には、〈何かについての考え〉という単純な意味があるのみで、その背景となる主体の意図の意味はない。したがって、何らかの機能を表すのでもない。

advice は、その意味の成り立ちから見ると、人から人へと伝えるものである。このことが、この語の使用法を規定している。advice は、他人の考えであるから、主体がそれを参考にするためには、主体はそれを求めて、人から与えられ、それを受け止める必要がある。advice は、授受の対象となる。この語と比べると、opinion は、〈何かについての考え〉という単純な形式を持ち、その背景となる主体の意図の意味を持たない。したがって、opinion は、授受の対象となることもあれば、授受されずに、心の中で形作られたり、表明されたりするものとなる。

2つの語の使用法の相違を示す例を観察しよう。advice は、必要とされ、求め、乞い、与え、受け入れる対象となる。(33) の例は、advice が動詞 need, seek, ask, give, accept の目的語になることを示している。opinion も授受の対象になり、(34) は、この語が ask, give, accept の目的語となることを示している。

- (33) a. I need your advice.
 b. Seek advice from health club on exercise routine....
 c. If they wish, the parents can ask advice from someone else.
 d. ...we will give you advice on what to do,....
 e. I will accept your advice.
 (34) a. We thought we'd ask your opinion.
 b. ...they were often invited to give an opinion.
 c. ...and the government accepted their opinion.

次の例では、opinion が、作ること、表明することの対象となることを示している。すなわち、(35) では、opinion が動詞 form, express, voice, venture の目的語になっている。

- (35) a. It's simply not possible to form an opinion on it.
 b. ...every citizen...has the right to express an opinion about science,....
 c. People want instant results and if they don't get it, they voice an opinion very quickly.
 d. Nutty ventured her opinion of Jazz and Bidy agreed with her.

この (35) に現れる動詞を、仮に「表出動詞」と呼ぶと、opinion はこの動詞の目的語になるのに対して、advice は、表出動詞の目的語にはならない。つまり、(35) のような使用例を、advice に関して BNC の中を探しても、見出すことはできない。具体的には、*...form (one's) advice..., *...express (one's) advice... などの表現は、表出動詞のどの変化形に関して、用いられない。意味の面から言い直すと、opinion も advice も授受することはできるのに対して、表出できるのは opinion に限られており、advice は表出する対象にならないということである。⁶

なぜ、このような相違があるのであろうか。その理由は、2つの名詞の意味構造にあると思われる。opinion の意味が、〈何かについての考え〉であるとすれば、(35) におけるように、主体がそれを出することは、社会的にありうることである。人は自分の見解を抱き、それを表明する。それとは対照的に、advice の意味が、上で仮定したように、主体が取るべき行動を決めようとしていて、〈その参考にするために知りたい他人の考え〉であるとすれば、advice は最終的には主体の心に到達しなければならない。しかし、He expressed (his) advice on how to do it. のように表出動詞を用いると、この文の意味は、advice を表出する (express) だけとなり、それが advice を求める主体に到達することが保証されない表現となる。おそらく、このように動詞の意味と目的語の意味との不整合が生じるために、この種の表現が用いられないのであろう。このように考えると、advice が表出動詞の目的語とならないことが、上で仮定した advice の意味構造の正しさを示唆していると言えよう。

この節の締め括りとして、advice の背景となる事態が具体的な表現として顕在化する事例を観察しよう。advice の意味の背景として、〈どのような行動を取るべきか決めようとする主体の意図〉があると仮定した。この中の〈どのような行動をとるべきか〉という部分が、次の例では、what to / how to 不定詞によって表現されている。(36) の下線部は、(a) 何を読むべきか、(b) どのように避けるべきか、減らすべきか、(c) どのように見つけるべきか、ということであり、この表出した動詞句の意味上の (暗黙の) 主語は、いずれも advice を求める主体と解釈される。

- (36) a. I wrote to my tutor at Brasenose asking for advice on what to read,....
 b. ...you may want to give advice on how to avoid, or reduce damage to their health.
 c. ...he had difficulty in knowing where and who to approach to seek advice on how to find information.

それに対して、opinion には、このような what to / how to 不定詞を従える表現は全くない。opinion が WH で始まる表現を従える場合には、(37) のような時制のある節 (現在形または過去形) になっていて、動詞句の主語も表現されている。

- (37) a. We have not offered any opinion as to what its nature is.
 b. The supporters won't change my opinion of what I'd like to do at Darlington.
 c. There was a difference of opinion what happened next,....

このような表現の相違も、2つの名詞の意味構造の相違によると思われる。adviceは、主体が何かをしようと思っていることが背景にあり、その思いの中の行動が表出するので、to不定詞の主語を表現しなくても、その意味上の主語は、adviceを受け止める主体に一致する。それに対して、opinionの意味には、そのような未来へ向かう目標がそもそも存在しないので、それがwhat to / how to不定詞として表出することもないのである。このような、adviceとopinionに関わる文法上の相違も、それぞれの意味構造の相違から現れると考えてよいであろう。

以上で、adviceの意味構造についての考察を終える。adviceの意味の背景としては、〈どのような行動を取るべきか決めようとする主体の意図〉が存在し、adviceの意味は〈その参考にするための他人の考え〉ということである。この意味の形式は、先に観察したevidence, informationと同じであり、その一般化を繰り返せば、〈主体の意図〉が背景にあり、〈その目的を遂げるための機能を持つと主体が認めるもの〉とすることができる。この形式の意味構造を持つ抽象名詞は、不可算となる。

5. おわりに

evidence, information, adviceという3語の意味構造が同じであることを確かめた。いずれの語の意味も、主体の心の中に前提となる意図があり、その意図の中で果たす役割あるいは機能を指し示すという点で同じ形式を持っている。平易な言葉で言えば、これらは、人が何かをしたいときに、その助けとなる事柄を表している。立証したいときの証拠、知りたいときの情報、行いたいときの助言、皆、その例であり、これらを表す名詞は、不可算となるというのが、本論の到達点である。

同じく抽象的な意味を持つsign, knowledge, opinionは、主体の意図とは無関係、つまり、誰かが何かを行いたいという希望とは関わりのない意味を持っている。しかも、これらは、可算として表現される。signは、可算として、knowledgeとopinionは、可算としても不可算としても現れる。

それでは、専ら不可算として用いられるevidence類と、可算としても用いられるknowledgeなどの違いはどこにあるのだろうか。ここからは、推測を重ねることになるけれども、考えないわけにはいかない。直観的に言って、可算性に関して、最も感覚的に分かりやすい例は、最小単位のある具象物の場合である。つまり、a boy, a chairなどの輪郭の明瞭な具象物は、数えることができる。それに対して、water, milk, soilなどの最小単位のない具象物は、そのままでは数えることができない。ここで、重要になるのが、最小単位を見出すための輪郭線である。輪郭線があり、それに囲まれた対象が幾つもあり、その形が類似していれば、1つ、2つ…と数えることができる。おそらく、可算という概念の素朴な認識は、このようなことであると思われる。

knowledgeなどが可算にもなることは、この抽象概念を認めるとき、そこにa boyなどの可算の具象物を見るかのような輪郭線を認めることができるからであろう。可算表現のa knowledge of law, a knowledge of societyなどは、knowledgeと呼びうる類似の形をしたものを幾つも認めることができ、その中の1つを示している。つまり、knowledgeの形式を持つ抽象物は、evidenceのように特定の主体の心を通さずに、その存在を幾つも認識することができるのであろう。このことが、knowledgeが可算になる理由であろう。

evidenceが不可算であり続ける理由を考えてみよう。本文の考察を受け入れると、evidenceの意味が成立するためには、その背景として、何かを立証したいという意図を主体が持っていること

が必要であり、evidence の意味は、〈そのための手段となる物事〉ということになる。evidence の意味が、このようであれば、主体が evidence であると認める物事であれば、どんなものでも evidence になり、そうではないと認めるものは、evidence ではない。つまり、evidence は、主体の意図の中での機能を表す概念であり、形を作る輪郭線も、大きさも、質も持たない。evidence には、数えるための基礎となる手がかりがない。この点で、evidence は、a boy, a chair などから遙かに隔たった概念である。このような理由で、母語話者にとっては、evidence は数えることが全くできない概念となっているのであろう。

注

- 1 本論で用いる「可算」「不可算」という用語は、英語の countable-uncountable, count-noncount, count-mass の対立に対応する。
- 2 たとえば、Huddleston and Pullum (2002: 335-336) を参照。
- 3 不可算の抽象名詞については、Jespersen (1961: 114-115)、Quirk *et al.* (1985: 247-248)、Huddleston and Pullum (2002: 335-336)、Swan (2005: 148-49) を参照した。
- 4 sign に関して唯一見つかった例は、sign to show である。この例では、sign が否定辞 no によって否定されている。
 - (i) She freed herself and they went on milking. Nobody had noticed, and when Dairyman Crick came round there was no sign to show that there was any connection between them.
- 5 ただし、「通知(書)」の意味では、advices と語尾 -s をとる形式が用いられる。これは、形のある具体物を表すためであると思われる。
 - (ii) Now we're looking to encourage our customers to send remittance advices electronically.... (送金通知書を電子メールで送るように…。)
- 6 ただし、例外は 1 例見られる。ここでは、主語が the words であり、人ではないことが関わっているとと思われる。
 - (iii) No doubt Ulpian wrote simply that the words created no trust but merely expressed advice.

参考文献

- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. (1961) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part II Syntax (First Volume)*. London: George Allen & Unwin Ltd. Reprinted by John Dickens and Co Ltd.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Swan, Michael. (2005) *Practical English Usage, Third Edition*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- LDCE 4 = *Longman Dictionary of Contemporary English, Fourth Edition*. (2003) Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.
- OALD 6 = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Sixth Edition*. (2000) Oxford and New York: Oxford University Press.
- OED = *The Oxford English Dictionary, Second Edition*. (1989) Prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. Oxford: Clarendon Press.
- WTNI = *Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged*. (1966) Massachusetts: G. & C. Merriam Company.

言語資料

BNC = The British National Corpus. BNCweb - Lancaster University (<http://bncweb.lancs.ac.uk/>)